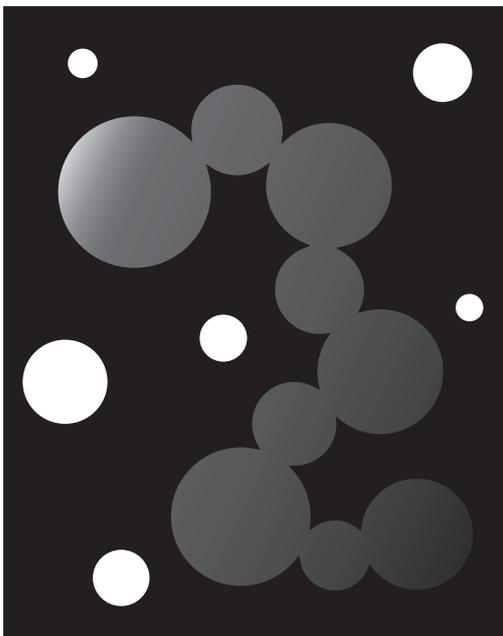
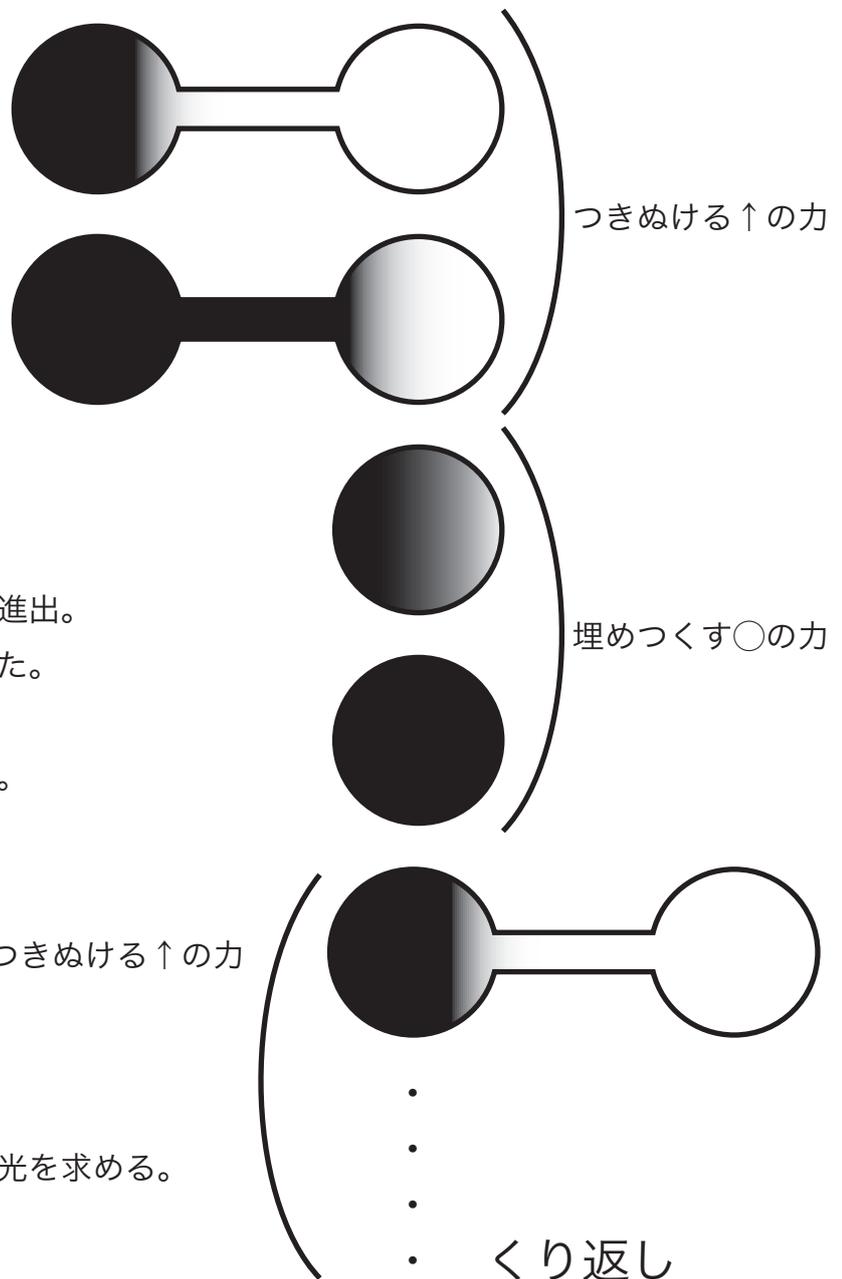


あたらしい部屋に入る時には、
あたらしい通路から
あたらしい部屋の光が入ってくる。
新境地もしくはそれを伝える者と
光源のイメージが強く結びつくこと
から考えると、そうになっているらしい。

光は、私たちにさらなる可能性を示唆する。
その時私たちの心は希望に満ち、
生き生きとした力がわいてくる。
海から、森から、洞窟から、ムラから、
あるいはしなやかさを失った古い体制からの、進出。
フロンティアを、私たちは古くから欲望してきた。
けれど革命の季節はいつまでも続かない。
いつしか新境地は統制され、安定し、停滞する。
部屋の中にはもう光はない。
あるのは退屈な安心と、閉塞感。
若者たちは光を求める。
このくり返しが歴史を作ってきたのだ。

では、私たちの本質は光なのか、闇なのか。
光を求めながらも、闇へと変質させ、さらなる光を求める。
おそらく、この終わりのない
欲求のサイクルこそが、私たちの本質なのだ。



私たちは常に、肉体・精神の満ち足りた状態であろうとするが、
かりに満足したとしても、それは長くは続かない。
常に満たされぬ想いを抱える私たちの存在は、
世界から「疎外」された状態にある。
これを「さみしい」と言いかえることもできるだろう。

人間の営みは「疎外」と「疎外の解消」の
生きる限り続くいたちごっこであって、
絶対の満足にたどり着くことはない。

だがそこにこそ、つまり、求め続ける姿勢によってのみ、
弁証法的な芸術表現の流れが生まれるのだ。